

チベット語文献から思うこと

教授 白 館 戒 雲
(チベット学)

チベット語文献のほとんどは、両面に木版で印刷あるいは筆写した横長の形をしており、しかもそれが、綴じられることなく用いられる。インドの「貝葉」を模した形であるが、材質は紙となっている。活字印刷が導入され、DTPソフトを用いた出版が盛んになり、手軽で持ち運び便利な洋装本が流通するようになった現在でも、この形式が廃れることはない。1912年から23年までの10余年の間、チベット・ラサ近郊にあるゲルク派の本山セラ寺に学んだ多田等観(1890-1967)は、チベット滞在中、大蔵経開版を企画するダライ・ラマ13世(1876-1933)に、洋装本・活字印刷による出版を進言したが、「簡単な方法や便利なやり方で正法を伝持するなどとは心得違いである」との理由で却下されたという(『多田等観全集：チベット仏教と文化』今枝由郎監修・編、白水社、2007年、pp.251-252)。伝統が廃れぬ理由は他にもあるだろう。個人的な意見であるが、チベット仏教で重視されるテキストの暗記という面について言えば、洋装本より貝葉形式の方が、1ページあたりの行数が少なく、覚えやすい(貝葉形式の場合1ページ7行ほど)。

チベット語文献は、深淵な仏教哲学を説いたものから、詩学、医学、暦学、歴史や物語に至るまで多岐にわたる。私が専門とする仏教学に関するものは、2種類に大別することができる。すなわちインド撰述の文献(rgya gzhung)とチベット撰述の文献(bod gzhung)である。うちインド撰述の文献とは、いわゆる「チベット大蔵経」に収録されているものである。チベット大蔵経が「カンギル(bka'gyur:み教えの翻訳)」「テンギル(bstan'gyur:註釈の翻訳)」の2部か



らなるということなどは、既に述べた事もあり(「チベット大蔵経とその影響」『法談』47号、2002年、pp.123-144)、ここに子細に述べる必要はあるまい。

チベット人は、7世紀よりインド仏教の伝統を受け継ぐため、文字を作成し、仏典を自らの言語に翻訳し始めた。814年には『翻訳名義大集』というサンスクリット語・チベット語の訳語集を作成し、訳語の統一をはかった。チベット語訳が「サンスクリット原典に極めて忠実」という評価が与えられているのは、その翻訳態度に一貫性がみられることによるのであるが、単なる機械的なものではなく、後世の読者たちに、内容が十分に理解されることに留意し、チベット語としての読みやすさを追求したものであったということも、忘れてはならない。即ち、『翻訳名義大集』の難語訳である『二卷本訳語積』(基礎的な仏教用語の意味理解に裨益するところ大なるテキスト)の序文に、「正法を翻訳するやり方は、[術語全体の]意味と矛盾せず、しかもチベット語としても、何であれ平易なものにしろなさい」(石川美恵訳『二卷本訳語積：和訳と注解』東洋文庫、1993年、p.5)とある。また、翻訳のほとんどが、そのテキス

トの内容を十分に理解し、教えの伝統を保持しているインド人のパンディタ(大学者)とチベット人翻訳官の共訳であるという事実も重要である。翻訳という作業は、教えの継承でもあった。以前私の研究が「研究者がサンスクリット語から日本語に翻訳したものよりも、チベット訳にもとづいて説かれたものの方が理にかなっており理解しやすい」と評せられたことがある。それは、私自身の力量というより、インドのパンディタやチベット人翻訳官たちのお陰である。近年、数多くのサンスクリット語原本が発見され、研究が進んでいるが、チベット語訳がその価値を失うということはないだろう。なぜなら、内容的にそれは、文字通りインド仏教の忠実な継承であり、原本の内容理解のために、ますます価値は高まるであろう。

カンギュルは、ギャンツェ・テンパンマ(rGyal rtse Them spang ma)本(1431年に成立)を原本とする「写本の系統」と、ツェルパ(Tshal pa)本(14世紀前半に成立)を原本とする「版本の系統」に大別される。カンギュル所収のテキストを校訂するには、この点に留意すべきであろうが、写本の系統に属するものは、種類が多い上、手軽に利用できるわけではない。ただ幸いなことに、本学図書館はロンドン写本のマイクロフィッシュを所蔵している。

テンギュルについては、北京の中国蔵学中心よりデルゲ版を底本とし、北京、ナルタン、チョネの各版との異同を示した『中華大蔵経丹珠爾(対勘本)』が出版されている。中国蔵学中心では、カンギュルについても同様の作業をおこない、これを完了、出版を待つばかりであるという。これには、世界で唯一ラサのセラ寺にしか所蔵されていないという最初の本版チベット大蔵経「永楽版」が校異に用いられていると聞く。

高い評価を得ているデルゲ版に対し北京版は、寺本婉雅による将来当初から、中国で作成されたものであることから——いわば本場のものではないため——誤記等が多いとの負の

評価があった。しかし、テキストによってはデルゲ版よりはるかに良い読みを示しているものもあり、また、ゲルク派の開祖ツォンカパ(Tsong kha pa, 1357-1419)が評価したナクツォ・ツルティム・ギェルワ(Nag tsho Tshul khrims rgyal ba)訳の『入中論』(北京no.5261)など、デルゲ版未収録のテキストが収められているなど、評価すべき点を有している。

チベット撰述文献の中で、私が最も親しみ、かつ重視するものは、ツォンカパが著わされた『菩提道次第論』である。なぜなら、それは、仏教を学ぶすべての者たちに、大乘の理論と実践の基礎を明快に示しているからである。

1974年6月、国際仏教徒協会の招きで来日して以来、30余年間、師の加持と多くの人々の助けによって、研究に専念することができ、この『菩提道次第論』についても翻訳をなすことができた。しかし、私にとってはむしろ、多くの研究者を育てることができたこと、換言すれば、チベット仏教の伝統の種子を蒔く事ができたこと、これが一番の誇りである。本学のチベット研究は、寺本婉雅に始まり、山口益は仏教チベット学を提唱、インド撰述のチベット語訳仏典の本格的研究を展開した。その後、稲葉正就がチベット文学と歴史についての多大な貢献をなし、チベット撰述文献に対する研究も開始され、今や、長期チベットに留学し、チベット語を自由にあやつる研究者も生み出した。大学の責務は、文化の保護と継承にあると私は考える。本学は、中国・インドのそれに匹敵するアジアの一大文明といえるチベット文化の研究により、その責務を果たして来たといえる。その伝統の中に身を置くことができたことを幸いにも思い、また、それが永遠に継承されていくことを強く信じている。